

〒467-8501 愛知県名古屋市長区瑞穂区瑞穂町字山の畑1番地 Tel 052-872-3452 Fax 052-872-1531
Mail: institute@hum.nagoya-cu.ac.jp HP: http://www.hum.nagoya-cu.ac.jp/~institute

●「名古屋の観光まちづくり名古屋の観光まちづくり」



ここ数年、研究所の共同研究プロジェクトとして「名古屋の観光」研究を進めている。その一環として昨年12月12日、公開シンポジウム「名古屋の観光まちづくり」を中区役所ホールで開催した。本学が協定を結んでいる日本政策投資銀行との連携事業であり、平日にもかかわらず観光・まちづくり関係者や市民、学生や教職員など約300名の参加があった。シンポジウムの模様は翌日の中日新聞でも大きく紹介された。

シンポジウムでは主催者挨拶につづき、日本政策投資銀行地域振興部参事役の藻谷浩介氏による基調講演、山田をコーディネーターにパネルディスカッションが行われた。パネラーは東海旅客鉄道相談役・須田寛氏、都市研究所スペース代表取締役・井澤知旦氏、名古屋市市民経済局文化観光部長・別所眞三氏、人間文化研究科教授・服部幸造氏、それに藻谷氏の5名である。パネルディスカッションの記録は、人文社会学部研究員・浅井ゆきこさんとの「共同報告」として今年度の研究所年報に掲載している。

いま「観光まちづくり」が注目されている。「観光まちづくり」は地域が主体となって、自然・文化・歴史・産業・人材など、地域のあらゆる資源を活かすことによって、交流を振興し、活力あるまちをめざすための活動である。今回のシンポジウムでは、第一線で活躍する専門家から名古屋の歴史や文化、まちづくり、観光について報告してもらい、「観光まちづくり」の課題を考えていくものである。参加者の質問や感想からも、シンポジウムの目的は果たされたようだ。今後も本研究所の特色を活かして、観光の共同研究プロジェクトを推進していきたい。 山田 明(人間文化研究科教授)

● マンデーサロン

教員間、教員と学生間の研究交流を目的とした月例懇談会(市民にも開放)です。

第11回 12月10日

山田陽子さん「『満洲泰阜分村—70年の歴史と記憶』

—歴史から学ぶこと—

山田さんは自分が編集委員として刊行された本『満洲泰阜分村—70年の歴史と記憶』をもとに「歴史から学ぶこと」をテーマとして報告しました。報告は泰阜分村大八浪開拓団の旧満洲への入植、開拓団員の生活、終戦後の残留、そして日中国交正常化後に帰国した人たちに対して泰阜村が行った定着自立支援などについて詳細な説明が行われました。今度の報告を通して、私は初めて日本国民も被害者だという事実を深刻に認識し、当時の開拓団員の生活に関心を持つようになりました。報告によると終戦後、中国東北部の中国の住民は、戦い合った立場を超えて残留した日本人を受け入れ、助けました。戦争という残酷な歴史の中で、こういう人たちは既に日中友好の種を撒き始めたということに一番感動しました。また、満洲分村移民を送り出した責任主体として小さな泰阜村の堂々たる責任を引き受ける姿勢にも感心しました。

一言で言えば、今度の山田さんの報告は日本と中国との国際交流を深く考えさせる内容でした。山田さんの声がとてもきれいだったので、内容が重い報告でしたが、その声に参加者の皆さんは魅惑されたようです。私と山田さんは同じく成田先生の下で研究しているので、この本を完成するために、山田さんが何度も中国に行っただけでかなり詳細な研究を行ったことは知っております。『満洲泰阜分村—70年の歴史と記憶』は泰阜村の村史として刊行されましたが、泰阜村の歴史を通して日本と中国双方の歴史全般を覗くことができるし、日中友好の促進にも意義深いものだと思います。そして、中国残留者問題への日本社会の注目を集め、戦争が残した問題の解決を促進する面でも大きな意義があると思われます。

朴香花(博士前期課程)

宮本佳範さん**「H・ヨナスの思想に基づく自然保護教育」**

この度、初めてマンデーサロンに参加いたしました。宮本さんの「H・ヨナスの思想に基づく自然保護教育」論は、現在の環境ブームの風潮に自然保護教育の在り方を再考する提言として意義深いものでした。実は、私は宮本さんと同じゼミに所属していますので、宮本論の構築を傍で拝見しております。ゼミではヨナスの思想をはじめとする様々な思想を分かりやすい比喻を用い、口調は穏やかながらも熱く語る姿が印象的です。今回は、「自然と触れ合うこと＝自然保護教育」ではなく、自然保護につながる教育となりうるという根拠を理論的に考えていくひとつの例示という主旨でした。最後に、宮本さんの受賞式のスライドが数枚紹介されました。受賞記念品の紹介もあり、飾るに飾れないとのことで押入れに眠っているとのこと。その話で、それまでの難解な話から一気に和やかな雰囲気になりました。

発表者と参加者が一体となってその場の空気を形作るようなあつという間の2時間でした。院生の参加は少ないようですが、自分の研究領域以外の発表は目から鱗の新鮮さがあります。毎月開催されているようですので、どうぞ皆様も一度参加されることをお勧めいたします。

大野裕美(博士前期課程)

● Human & Social サイエンス・カフェ

丸善と連携して今年度からはじめた新企画、月1回・日曜の開催(カフェ・グラシュエ)で開催。

第7回 12月16日(日)

テーマ:「アメリカ文学のニューオーリンズ」

講師: 田中敬子教授(人間文化研究科教授)

わかりやすく、楽しく参加できてよかったと、感謝しています。ニューオーリンズという地名は、なんとなくなじみがあり、(音楽の関係か?)アメリカ文学の中では多くの作品の舞台になっていると思いついていましたが、案外に少ないのだなという印象です。(フォスターなどの歌の舞台もあの辺と思いついていました。)

一国の文学などを論議するときには、当然、その国の歴史や地理、時代背景、社会背景、等の基礎知識が必要となりますが、配布資料を見ていて、自分が特に、地理面・アメリカ開拓史(ニューオーリンズの歴史)においてうかつかつかということに再認識しました。

お話をきいているうちに自分の場合、映画を見て、アメリカの文学像を構成している可能性も高いということも気がついてきました。

田中先生の聴講生からの質問に対する懇切な、ある意味ではやさしさを感じさせる対応には敬服するとともに、時

間配分として十分に質疑の時間をとられていることで、参加者として安心して、質問の手を上げることができたことを申し添えます。

藤田吉長(参加者)

第8回 1月27日(日)

テーマ:「途上の言語

—イタリア・ピエモンテ地方のオック語への旅」

講師: 佐野直子(同研究科准教授)

以前から会の活動は知っていましたが、今回のタイトルに引かれ初めて参加しました。私たちが毎日何気なく、あるいは意識して使っている言語が、人間の生活や文化、歴史にどれほど重要かと、益々強く思うようになってきているからです。イタリアの山岳地帯の少数派言語、オック語の成り立ちから変遷、現在の状況などをお聞きしました。佐野先生が現地取材の際、日本人女性が何しにこんな辺鄙な場所にきたのかと怪しまれた時、オック語の歌と一緒に歌って、一気に疑いが晴れたことなど、言葉がいかにか人と人の関係を繋げるものかと実感。最近、若者たちでオック語の歌詞で音楽を作るのが流行し、CDで少し聴かせてもらいましたが、時間があれば1曲聴きたかったくらい。で、日本でもこの数年、沖縄の言語を取り入れた曲が人気を呼んでいるのと同じような現象ではと、面白く思いました。

イタリアでは「言語的少数派保護法(482法)」(1999年)が制定され、オック語など少数派言語が明記され、補助金もどんどん出され、保護する運動が広がったものの、さまざまな問題点もあると話されました。ひょっとしたらこのオック語って何百、千?年後の日本語に通じるかも、と身近に考えてしまいました。今、世界の少数言語がどんどん消えていく中、日本語を話すのは日本だけ。「多文化・多言語主義」に賛成ですが、では狭い地域でしか使われない言語をどう活用し、残していくかとなると、正直わかりません。「世界遺産」として自然や街並みが保護され、こういうものは貴重だと世界の人たちに認識されていますが、少数言語も同じように大事なものだと思います。

2時間があつという間でした。この先、オック語がどうなるか気になり、「地域によってバラバラなオック語を一つに統一してきちつとした言語にしたら残るのでは」と帰りがけに先生に話しかけてしまいました。「無理に統一を図らず、オック語を使う人々が、ああだ、こうだどうしたらいいかと繰り返し議論し続けることが、この言語が生命力を保つエネルギーになるでしょう」と返して頂きました。ありがとうございました。

白石(参加者)

第9回 2月17日(日)

テーマ:「少年犯罪」

講師: **山田美香**(人間文化研究科准教授)

概要: 戦前の少年犯罪の要因・不良化の傾向、警察・検察の少年犯罪対策について、現在の愛知県の少年犯罪の要因、少年犯罪予防の状況について、中国・台湾の少年犯罪の要因、学校における少年犯罪予防について説明。

第10回 3月2日(日)

テーマ:「ブッシュ外交の総括—「対テロ戦争」の8年」

講師: **平田雅己**(人間文化研究科准教授)

以前から耳にしておりましたサイエンス・カフェに参加しました。今回は、昨年春に私が受講させていただいた、平田先生のスピーチでしたので背中をぐっと押され参加しました。演題はブッシュ外交の評価という、大統領選挙に沸くアメリカ外交の実態という、今を旬とするテーマで大変興味がそそられました。

常に事実の積み重ねによる歴史的イベントの検証、またそれに至った決断の真相にせまるという平田先生の手法は、大変おもしろく楽しませていただきました。今回の副題であるイラク戦争の政策、という世界が注目しているテーマも事実を積み重ねていただき、ホントかよ、といたいくなるような事実でした。

私見ではありますが、アメリカという国は移民国家ではありませんが、基本的に白人中心の発想を持った政策を進める国でもあり、自分のスタンダードに合わない、またどんな分野でも自国より少しでも優越的地位にある国が出てくると、敵愾心をむき出しにするという競争国家でもあります。しかしこの国は、必ずどこかで振り子が戻る国でもあり、先生の説明にもありましたチャーチルの言ったとうりの国でもあります。日本政治ではありえない、やれば立ち上がることが出来ないほどの袋叩きに合うのは必定。

平田先生のスピーチはこれらの政治状況の中で、誰がそのときどのように行動し、どんな発言をしたか、具体的に示していただき、当該人物の職歴などからも説得力のあるものでした。時々スピーチは主題とは違ったわき道に入りますが、歴史の面白さはこのまったく違う角度から見てみるという、これが大切といつも思っております。シンディシーハンに事例がそうです。ほんのささいなことがその後の政治に大きな影響を与えたことは多くあります。歴史検証の醍醐味でもあります。

大西 聡(参加者)



サイエンス・カフェ開催記録 2007年6月～2008年3月までの開催実績

月 日	タイトル	講師	参加人数
6月17日	戦国武将の文化活動 『月庵酔醒記』を通して	服部 幸造 教授	19
7月22日	大人になるってどういうこと? —大学生への調査結果から問題に迫る—	後藤 宗理 教授	17
8月19日	沖縄の祭りと芸能	阪井 芳貴 教授	23
9月16日	ポテンコ?の言語学 —ソシュール生誕150年によせて—	成田 徹男 教授	16
10月21日	1930年代のヨーロッパ・ドイツの文化	森田 明 教授	17
11月18日	血液型性格論のホントのトコロ	久保田健市 准教授	17
12月16日	アメリカ文学のニューオーリンズ	田中 敬子 教授	19
1月26日	途上の言語 —イタリア・ピエモンテ地域のオック語への旅	佐野 直子 准教授	19
2月17日	少年犯罪	山田 美香 准教授	16
3月2日	ブッシュ外交の総括 —「対テロ戦争」の8年	平田 雅己 准教授	18

リレーエッセイ 人間・地域・共生

バックネル大学を訪れて 谷口幸代(人間文化研究科准教授)

2008年1月、私は「The Bucknell University / Nagoya City University TA Fellowship」委員として、アメリカのバックネル大学を訪れた。本学は同大学に学生を派遣している。派遣学生は自らも学びながら、日本語のティーチング・アシスタント(TA)をつとめる。

この制度を軸に相互連携をより緊密にするため、本学の特別研究奨励費によるプロジェクトが立ち上げられた。昨年はエリザベス・アームストロング先生が本学を訪れ、公開講演会の他、日木先生の英文法の授業や学生と寺山修司を読む会に参加された。今度は本学の側が訪問することになり、委員長の日木先生のお供で私も同行させていただいた。

訪問の第一の目的は、現在派遣中の桜川麻木さんが教える現場の参観である。授業はゲームを取り入れるなど楽しく勉強できるよう工夫されていた。たとえば電話での会話を教える時には、TAの桜川さんに夕食の誘いの電話がかかってくる設定で見本を示す。相手はジョニー・デップ(!)である。彼女が彼のファンだと知っている学生達は大喜びだった。こういう本人の努力と先生方のサポートにより学生から信頼を得ていた。世界各地から集まった各言語のTAとも積極的に交流するなど、充実した留学生活を送っている。

桜川さんの授業の他、日本語の各レベルの授業を見学した。最上級生の授業では、私は『夏の靴』など川端康成の短い小説と一緒に読んだ。受講生は、アームストロング先生の紹介によると、「わからないことをわからないと言える」、探究心に溢れたフレミングさん、日本語を書くのが上手なピントさん、「スキャナーのように」言葉を正確に記憶するイーさん、と異なる才能をもつ優秀な三名である。前以て配布されていたテキストにはびっしりと予習の書き込みがされており、少女は鳥の化身か、他の子ども達と違う境遇なのか、といった疑問が次々に出された。「靴が咲いていた」のような川端の表現の吟味から、日本人の季節感や色彩感覚まで話題が広がった。

教室の外では、構内のカフェに日本語の受講生が集う「Japanese Table」にも飛び入り参加した。日本語、日本文化、名古屋、本学のことが主な話題だったが、「famous player, Fukudome」を知る学生がいたので、Ichiro と共に名古屋ゆかりの選手だと伝えてきた。

こうした交流、そして一層の協力への約束をお土産に帰国したところ、つい先日、バックネル大学の学生達からうれしい贈り物が届いた。手書きの日本語の手紙である。一人一人の顔を浮かべながら繰返し読んだ。

今回の訪問が実り多いものになったとすれば、それはバックネル大学の学部長をはじめファカルティの方々のあたたかな歓迎のお蔭であり、日木先生の細やかなご配慮とご指示の賜物である。

一番大事なことが最後になったが、心よりお礼を申し上げたい。

編集後記

2007年度最終のニュースレターをお届けします。
毎号サイエンス・カフェ、マンデーサロンの報告だけでなく、かなり紙面を埋めることができました。研究所主催の定例活動が軌道に乗っていることを示しています。
来年度もよろしく願いいたします。(さ)

●<Human & Social サイエンス・カフェ>今後の予定一覧

- ・4月20日 「公共政策と財政とまちづくり」山田 明教授
- ・5月18日 「日本人の英語はどこまで通じるか」宮田 学教授
- ・6月15日 「不登校:理解と対応」奥平俊子准教授
- ・7月20日 「カントと人間—剛と柔」森 哲彦教授
- ・8月24日 「自助・共助・公助の福祉公共哲学」福吉勝男教授